

7月18日にいよいよ開幕 プロマーのひそひそ話

クラシック音楽の祭典プロムスで演奏されるあの名曲を生んだ
作曲家のエピソードを、オペラ歌手、榎本明子がスパイスをかけてご紹介。

「リズムの創作者」オリヴィエ・メシアン

Olivier Eugene Prosper Charles Messiaen
(1908.12.10 アヴィニオン生まれ 1992.4.27 パリ郊外クリシーで没)

今年生誕100年を迎えるメシアン。知る人ぞ知る彼の人生を、さらっとたどってみることにしましょう。

文学的教養豊かな両親から生を受け、学生時代に4000冊もの本を読破したおませな彼は、10歳から11年間コンセルヴァトワール（パリ国立高等音楽学校）で学び、22歳でパリのサン・トリニテ教会の主席オルガニストに抜擢され、亡くなるまで60年以上オルガンを弾き続けます。彼の即興演奏は、瞬間にパリ中の話題になったそうです。

幸せの絶頂期、クレア（ヴァイオリニスト）と結婚。一人息子パスカルの誕生が、元々敬虔な信者であった彼にカトリック教義に根ざしたオルガンのための大作、昇天（6）*、永遠の教会の出現（42）などを書かせています。また第二次大戦中にナチスの捕虜になった際にも自由精神を忘れず時の終わりの為の四重奏曲（67）を作曲、たまたま同じ取寄所内にいた楽器奏者と共に初演を果たしました。

オーケストラ作品で外せないのが、トゥランガリラ交響

曲（64）。彼に興味を抱かせたインドのリズム、ギリシャの旋律を取り入れ、これを機にエキゾチック名作風に突入。リズムの創作者といわれる所以でしょう。電子楽器を使った怪しげな音が特徴的な一曲です。夏の夜に最高！

クレアの病死後、52歳でイヴォンス・ロリオ（ピアニスト）と結婚し、新婚旅行を兼ね渡日しています。才能ある彼女の助けを借りて、日本の山奥で幾種もの鳥の声をすべて譜に落として作った作品のひとつが鳥のカタログ（PCM1）です。

めったにお目にかかれないオペラ、アッジジの聖フランチェスコ（70）。「70歳にもなるのだから、少々無茶なことをしても良いだろう」と、作曲・製本に計8年、リハーサルに半年（普通長くても1カ月）をかけ、パリのオペラ座で小澤征爾指揮により1983年に初演され話題を呼びました。

カッコ内の数字は、プロムスで行われるコンサートに割り振られた番号です。プロムスに関する詳細につきましては、以下のサイトをご参照ください。www.bbc.co.uk/proms/2008

*今週のプログラムからのお勧めはProm6

世界一大きい、ロイヤル・アルバート・ホールの
オルガンによるメシアンの教会音楽は必聴です。

7月21日（月）19:30～

♪指揮：ミュンヘン・チョン ♪オルガン：オリヴィエ・ラトリ
♪会場：ロイヤル・アルバート・ホール

豆知識

Prom3など、夜10時から始まる小さなコンサートもお勧め。
メインのコンサートが終わり熱気が冷め始めた会場で、
ゆっくり音を楽しむのもオツですよ。

榎本明子 国立音楽大学声楽学科卒。その後、元ロイヤル・ハウス・オペラ教育部門などでオペラ研修。蝶々夫人のスズキ役でヨーロッパを回るほか、月例Twilight Lecture Concertを企画演奏する傍ら、「自分の声と出会おう」と幅広いジャンルの声を使う人達にレッスンをを行っている。通称「あきゴン」。www.akiko.org.uk